

平成元年二月二十八日 郷研究会資料

第六十四回史跡めぐり案内

古志賀真谷氏館跡

越谷市郷土研究会

理事 山崎 善司

史跡めぐり案内

(古志賀谷氏館跡)

とき 平成元年二月二十六日 (第四日曜日)

集合 越谷駅前 午前八時 (分)

コース

1、古志賀谷太郎館跡

〓御門見通 〓御殿通り 〓館跡(会田喜一郎氏宅)

〓馬洗場道

〓天嶽寺内の構え掘遺溝

〓首塚跡

〓建長元年板碑

〓館跡取り水口 〓御殿裏通り

2、古志賀谷四郎館跡

〓八幡神社 〓文和二年板碑

〓澄海寺跡

〓四郎構え掘遺溝

陸羽街道・赤山街道交差点 〓取り水口

……昼食

3、古志賀谷二郎館跡

〓バス〓迎撰院前下車・会田太郎兵衛屋敷跡 〓構え掘遺溝

〓愛宕様

〓野尻種荷

〓神明神社

〓旧大神宮跡

〓板碑

発見場所(望遠)

〓迎撰院

〓板碑

〓バス

……帰路

案内者

山崎

善司

当研究会

理事

参加費

1、300 円也、

但し、中華新新にて昼食、各自自弁の事(食事持参も可)

申込先

越谷市宮本町二丁目

谷崎隆夫方

越谷市郷土研究会

06-1175-17

十口土心賀谷谷氏館跡

1、古志賀谷太郎館跡

古志賀谷氏が、歴史上に見えて来るのは、千葉大系図中、野与党ノノ大藏新大夫行長を祖とする箕勾系に、箕勾左兵衛尉為光の弟、古志賀谷二郎為基の名が見えて来る。

この為基が、何時頃の人物かと言う事は、即断は困難で有るが、千葉大系図を見ると、古志賀谷二郎為基から見て、曾祖父に当る、箕勾二郎経能の弟に渋江五郎光衡（八条）が居る。

この光衡に付いて、吾妻鑑の建暦三年（一一三三）五月の項に、「（前略）但し、地頭渋江五郎光衡は本所如く安堵被下可之由被仰下可所也」と見え、既に建暦三年には、地頭に補任されて居る。

又、その居住したであろう古志賀谷氏の館跡の周辺に、建長元年（一一四九）の板碑を見る事が出来る。以上の事柄から判断すると、大体建保ケンポ建長（一一二五ケイ四九）の頃に生存した人物と言える。

尚、推測で、年代を合わせるならば、下図の千葉系図の如く成る。（仮説）

五郎光衡は、建暦三年（一一三三）既に地頭、仮に60歳とすると、建長元年（一一四九）板碑が、為基のものとするれば、仮に、建暦三年の時為基8歳として、建長元年を没年として34歳位となる（4人の男子が居た）、二代四郎為重が、この年（一一四九）に1歳とすれば、25歳で三代太郎秋近が生まれたとして建暦元年（一一三三）の板碑が秋近の碑とすれば、52歳没となる。貞和三年（一一四七）の板碑を四代目の没年とし、秋近21歳の時の子として52歳没となり、一応年代的には符合する。

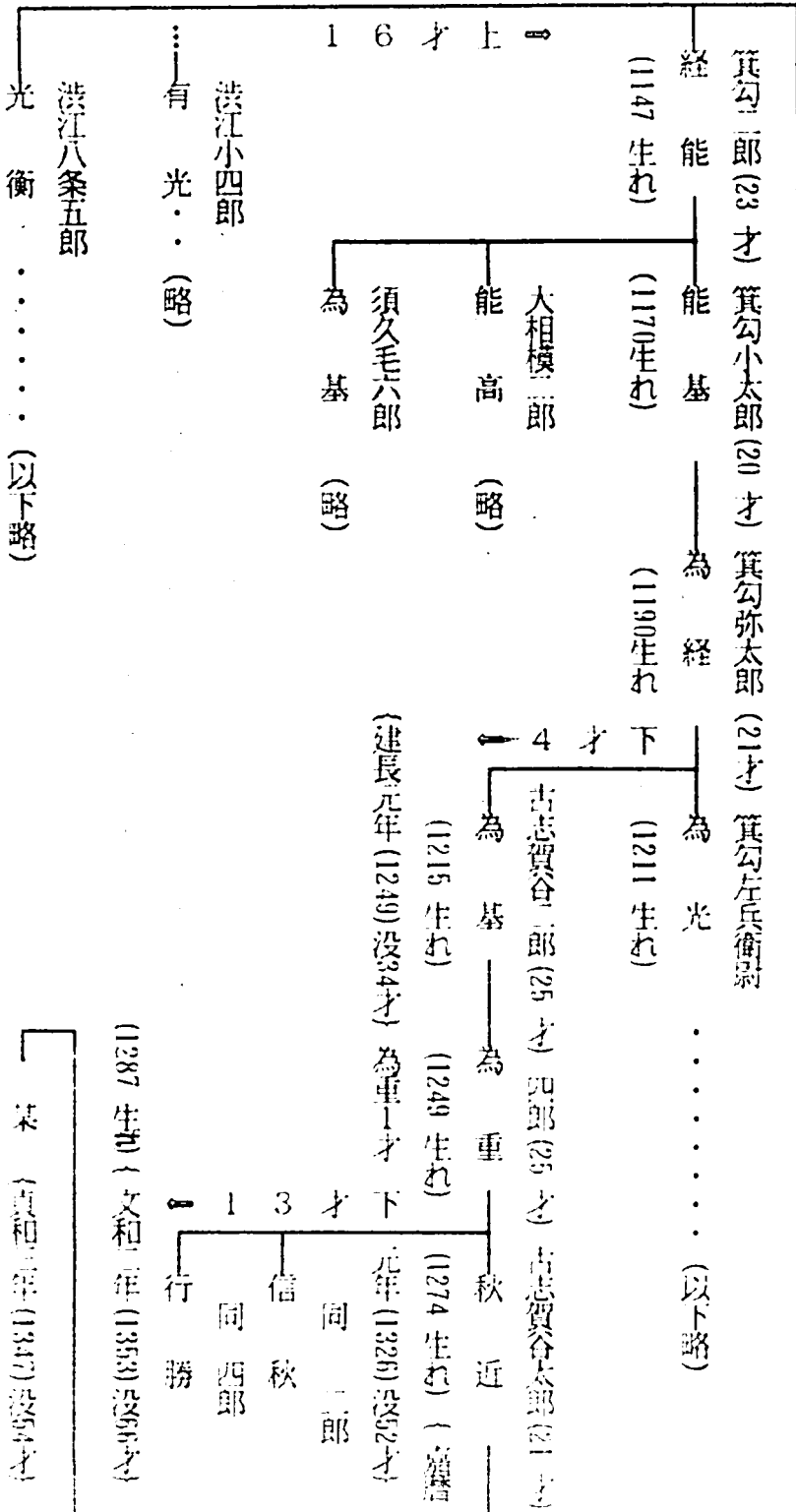
千苗系八五示(抄) (仮説)

大藏新大夫 行長
 号龍大夫 経光

註1、太郎は20才・二・四郎は24才位の結婚とする。

2、二郎は2才・四郎は13才・五郎は16才下とする。

3、(一)板碑の年号を仮に没年とする。



(1163生れ) (建暦三年(1223)仮没年とす)

(以下略)

(1287生れ) (文和三年(1333)没)

某 (貞和三年(1313)没)

(1295生れ)

御殿地表通り御門見通し

この通りは、徳川時代のものと思はれるが、館跡を考える時見逃せ無き道である。

日光道中より 御殿の御門に至る道で、門が見えたので「御門見通り」と言い、付き当たりに門が在ったと思はれる。

館 跡(会田喜一郎氏宅)

御殿・元御殿と言う地名が在るが、それを含めた全地域が、嘗ての館(やかた)跡ではないかと思はれ。現会田喜一郎氏宅が、その現況を良く残して居る。

越谷町鑑

「一、御主殿跡御見捨地、右御主殿は慶長九年増林村より越ヶ谷に引ヶ申候、然処

明暦三酉年江戸太火にて而御城御焼失の節同年仮御殿に引申候、

「二、御殿地之儀、本町裏にて而在御取私後御林と相成申候、

馬 洗 い 場

葛西用水御殿橋を渡ると二軒目、左に折れる二間幅程の道が在る。この道を道なりに北北西に行くと元荒川土手に突き当たる、尚、川の中を対岸に近い所迄線を引く、上流400mに市神社がある、そこから、旧河道の土手に沿って線を引き(註、嘗て、元荒川は、花田地区を大きく迂回していた)、

その接点に当たたる所、川の対岸近くの地点が、嘗ての馬洗い場と云われる所である。

越ヶ谷瓜の蔓、「一、馬洗場と申候は、元荒川へ石畳にて而下り申候、会田出羽騎馬裾場の跡

也」、

「市神より馬洗い場迄、貳百間」、

「御殿屋敷向堤通元荒川曲角手前馬洗い場と云、石畳にて而川へ下り申候、

会田出羽裾場也」、

天嶽寺・久伊豆神社内の構え掘遺溝

葛西用水の御殿橋を渡り、尚、進むと宮前橋（寺橋）に出る。川を渡り直ぐ左を見ると、久伊豆神社参道が在る。其の左に庚申塚、尚、左に天嶽寺入口の御影石の門柱が見える。

御影石の門柱を過ぎると、左右に石塁が在り、20 m程の所に左右共、石塁が切れる所が在る。

これが、嘗ての、古志賀谷氏館の構え掘の水道（みずみち）である。（註、古くは、現在の川は無く、天嶽寺とは地続きで有つた）、

越ヶ谷瓜の蔓に、「元荒川の儀、大沢境古川小林境古川之通、増林村迄は遠に有之所、慶安二

・三年中、天嶽寺掘通に相成り申候」、

水道は、石塁を越すと、直ぐ左折し、お地藏様の後を通り石塁の切れた所で右折れし、久伊豆神社の参道一の鳥居の先を横切る、石の太鼓橋の下を通り、花田村への街道（岩井街道）沿いに左折する。

水道は更に、二の鳥居迄流れ、右に折れて街道を横切る。

滝田氏と一柳氏との間を東に流れて滝田氏と越谷高等女学校（旧校舎の裏に深い水路が有つた）の間

を通り抜けると、花田を迂回して来た元荒川（旧河道）に突き当る処が、水の落ち口となる。
この水道が、古志賀谷氏館跡の構え堀の水道である。

御殿権荷と首塚跡（ちよっほり山）

御殿権荷は、宮前橋（寺橋）を戻り、右折れすると二又道に出る、右上手道を行くと、川側に御殿権荷が在る。大正十三年の河川改修の時に、川の中となった所に在った社を、今の所に移して権荷を祭祀し、御殿町持ちの権荷とした。（四社権現が在ったと記して在るので、元は四社権現と思はれる、）

越ヶ谷瓜の蔓に、「四社権現之儀、出羽陣屋内之鎮守也」、

首塚跡は、御殿権荷の向い側に、嘗て、木が生い茂り、小高い盛土の所が在った。そこが、首塚跡（ちよっほり山）である。今は平に馴らされて其の場所の確認は不明であるが、古老の話では「渡辺氏（井戸由）の権荷は、川の中に在ったお宮で有る」、「その塀の外側の土手道に寄った所に、木が繁り小高く、土が盛り上がった所が有り、昔から人が寄り付かぬ場所であつたと云う」。

越ヶ谷瓜の蔓に、「是は、会田出羽手前仕置候者埋申候場所の由、又は、ちよっほり山にて而頭に似候付申候由」、

「御殿屋敷四社権現宮在り併頭塚在り、山の形古来頭に似たる故申せし共、
又出羽手前仕置之者埋し場所之跡成共」、

建長元年板碑

御殿稻荷の隣に、越谷市の文化財として川の端に建っている。元は、宮前橋からの二又道の所に建っていたが、文化財に指定された時、今の所に移された。

建長元年板碑は、越谷市有形文化財に昭和四十五年三月二十五日、市指定となった。越谷市内発見の板碑の中では、最古のものである。高サ155m、幅56m、市内最大のもので、種子は、梵字の弥陀一仏で、その彫りは深く、鎌倉期の特長を良く現わしている。

古志賀谷氏館跡の痕跡は、地形の他には、確實なる手掛かりに成る物は、この板碑のみで有る。

この館跡の区域は、その後、天文く弘治の頃、会田出羽資清の屋敷と成り、二代資久の時に慶長九年(一六〇四)に至り、徳川家康の為に御殿を築き差し出してより御殿地域と成ったもので有る。

館跡取り水口

建長板碑の所から、土手を西に進むと、葛西用水樋口がある、尚、館跡の裏通りを進むと、古びた木戸がある。この中に、嘗ては、深い堀が有り、これが館跡の構え堀遺溝の取り水口で有る。

今は、反対に排水管が埋められて、構え堀の遺溝は、痕跡のみと成った。

ここから、取り入れた水が、館の構えを回り、先に案内した天嶽寺の遺溝へ流れて行くので有る。

御殿下通り

取り水口より、土手を西に進むと国道、南に折れて直ぐ、左に入る細い徳道が、御殿裏通りである。この狭い道が、嘗ての、「御殿下通り」である。国道の向い側を見ると、日光道中に続く御殿下通り道が見える。この狭い道を入ると間もなく、左に折れて土手に出る。今は、行き止まりで有る。道を入って直の所に、庚申塔があり、ここの右の狭い道が御殿地と元御殿地との境道で有る。

この元御殿町の側が、江戸時代には、御殿番小杉藤左衛門の屋敷跡と思われる。

古志賀谷氏館の頃は、現在の御殿町と元御殿町を含めた地域がその区域ではなかったかと思われる。

2、古志賀谷四郎館跡

四郎の館（やかた）跡は、太郎館跡と地続きで、元荒川が花田地区で迂回して来て付き当たり、又、左に曲折して瓦曾根に至る所、詰り、新町三、二丁目日光街道の南側（南町並）の地域が、四郎の館跡、その南端に八幡神社と澄海寺跡が在る。

この神社には文和二年の板碑が所蔵されて居り、この地を取り囲む構え堀を見る事が出来、古志賀谷四郎か二郎かは、定かでは無いが、その生活の痕跡を見る事が出来る。

註、四郎館とした根拠は（2ページ千葉大系図参照）、太郎秋近（1274生れ）依り、13才年下と仮定して、1287年生れ、文和二年（一二五三）を没年とすれば、66才と推定した。

八幡神社

日光街道より参道が有る。石の鳥居を潜ると左に天和二年（一六八二）の手洗鉢が在り、神社の正面前に会田石と記した石が在る、三野宮巳之助が指し上げた石と云われ、奉納相撲が盛んな所であった事が知れる。往時は裏に陸羽街道が通つて居り、神社の向きも違つて居た事と思われる。

新編武蔵風土記稿、「文和二年ト刻シ青石ヲ神体トナセリ」

越ヶ谷瓜の蔓、「一、社地二反八畝二歩、八幡宮別当、天嶽寺」

文和二年の板碑

この八幡神社には、御神体として、文和二年（一三五二）の板碑を所蔵している。

額に、「当八幡神社御造営之儀者人皇五十九代御光厳天皇之御宇而將軍足利尊氏之時代文和二年巳年奉建立即御神体之像御鎮座也、而之自年号及於文政三辰歲迄四百七十二年也、

辰 十月

会田久右衛門

河村朝右衛門

澄海寺跡

この八幡神社の南隣に在つたが、今は廃寺で、空地と成つて痕跡を留めるのみである。

戦前迄は、日光街道よりの参道が在ったが、今は塞がれて通れ無い。

新編武蔵風土記稿、「羽黒行人派修験江戸日本橋音羽町普門院配下本尊大日ヲ安ス」。

越谷町鑑、「八畝十四歩、出羽国羽黒山玉前寺末、天台宗玉竜山澄海寺」。

越ヶ谷瓜の蔓、「澄海寺之儀、天台派羽黒山法漸寺末修験之由、古來より右之所に罷居、

祈願之日家を持取続罷在候、妻帯不仕候、」

四郎館の構え掘遺溝

八幡神社の周囲には構え掘の遺溝が良く残っている。

元荒川よりの取り水で、館（やかた）跡と八幡神社と澄海寺を取り囲み、瓦曾根境に向かって落ちて
いる。

この、取り水口は観音横町の突き当りの塚（いり）である。

陸羽街道・赤山街道交差点

奥州街道と云うは、日光街道の出来る以前、瓦曾根より六本木、中町横の筋が本通りで、本町二丁目
の田中青果店と関谷酒店の間の愛宕野道から四丁野へ行く道であった。

越谷瓜の蔓、「（前略）慶安以前元道中は、千住より大原通八条堤より南白西方堤通瓦曾根御井堤よ

り六本木中町横の筋往還成りしを、千住より中町橋際迄直道に成申候」。

是より、古い時代には、陸羽街道と云い、瓦曾根の久伊豆神社より、昭蓮院脇の観音堂から右に越ヶ谷に向い、薬師堂（修験東正院）より、掘り端を澄海寺・八幡神社脇を通り、四郎館跡の構え掘なりに赤山街道交差点へと向い、越谷小学校で赤山街道に突き当たり・学校の北側で赤山街道と分かれて、浅間神社・四町野道愛宕神社（現四町野道鉄道際）・迎旗院へと向う道である。

この道が、古道である証に、山の神を祀る石が、赤山交差点近くの森田氏宅の庭に在る。

註、赤山街道は後から出来たので、この取り水を分けて街道の下を越し、出羽村に至る水路が有る。

四郎館の取り水口

赤山街道交叉点より、日光街道を通り越して、尚進むと、元荒川の突き当りに六本木塚が在る。

慶安以前の往還本通りと記されて居るので、観音横町突き当りの、塚（いり）が取り水口で有る。

この取り水口は、奥州街道が出来る以前は、もっと日光街道寄りになつたと思はれる。

*この奥州街道は人工的に築いた土手道（荒川が人間川に瀬変えとなる頃）であるので、それ

以前の道は、前記の陸羽街道である。

3、古志賀谷 一 郎館跡

古志賀谷 一 郎館跡は、四町野（現宮本町二丁目）の迎旗院とそれに隣接する、会田太郎兵衛屋敷跡と

、今は川の中に成ってしまった、大神宮を含めた地域が、古志賀谷二郎か四郎かは定かでは無いが、その館跡である。 註、元の四町野村は、今は廃止して宮本町になる。

会田太郎兵衛屋敷跡（四町野会田家）

勿論、古志賀谷氏館跡の一部で在る。明治の地図に依ると、宮本二丁目信号より神明下方面の道は無かったので、迎摂院と会田太郎兵衛屋敷跡（現川口市元郷在住）は一区画で有った事が解る。

四町野道を越ヶ谷より進み、宮本二丁目信号を、右に折れて土手へ抜け、左折して岩槻方面に向かう道（現土手道）が本通りであった。

会田太郎兵衛屋敷跡を見ると、構え堀が（迎摂院を含む）、屋敷跡を取り囲んでいるし、その外側には神明宮・地藏院・野尻権荷・弘誓寺・疣権荷・薬王寺（十王堂）等が取り囲んで居て、古志賀谷氏居住以前からの、中世以前の生活の痕跡を見る事が出来る。

註、愛宕様は、元は、四町野道に在ったが、会田氏が自分の屋敷内に移転（鉄道が出来る頃）した。

二郎館跡の構え堀遺溝

取り水口は、迎摂院の西側に在ったが、今は埋められ、東側の四町野用水より取っている。

堀は深く広く良く整った構え堀で在った。

今は、全部コンクリートの側溝となり上蓋が成されて、往時の面影は無い。

地藏院と野尻種荷

ここ迄が、居住と耕作の可能な土地で、湿地との境に出来た墓地で在るので野尻の地名が残る。種荷も同敷地内に祀られて在る。

四町野村除地等書上、 「境内御除地、式反八畝歩 地藏院」、

神明神社

神明橋から土手を下り50mの所の、浦和・越谷線の端南側に在る。嘗ては、今の神明橋の所、土手の中で川の流れの端に在ったが、橋が出来るに際し、今の所に移転と成った。

元の宮は、今の倍も在ったが、敷地が無いので、小さく建て替え今の様に成った。

旧大神宮跡

旧大神宮とは、今の神明橋の所、流れに削り取られて川の中と成ってしまった。その後建てられた宮が、これも土手の中の流れの端となり建つて居たが、橋が出来るに際し浦和県道の端に移転と成る。明治二十八年の地図によると、土手の中、流れの端に神明宮と見えるのは、これである。

神明下村は、川に沿って長い村である。嘗て、参道の長い神社が在り、その神社付きの村と言えらる。

話によると、『元のお宮は、五里四方には、是より立派な神社は無かったと言われて居た』。
新編武蔵風土記稿 「大神宮と在り」。

板碑発見場所 (遠望)

越谷市神明下と南萩島との村境で、元荒川中州の川の中から板碑が沢山発見された。

康正三年(一四五七)を上限として寛正・応仁・文明・明応八年(一四九九)迄四十数年間に渡る年記の板碑が、然も、元荒川の河床から出て来たと言う事は、何を意味するのであろうか？

この板碑こそが、古志賀谷氏の滅亡に関する、唯一つの、証拠と成る板碑では無いかと思われるのである。

この問題に関しては、私著「古志賀谷氏館跡思考」に記したが、発見された板碑は、今、越谷市歴史資料館に保存されて居る。

この板碑の発見者、桃木源之助氏は、当時の事を次の如く語って居る。『投網で魚取りをして居る時に、板碑が網に懸かった、引き上げて見ると後から後から沢山出て来るので驚き、迎徳院に届けた。川に潜ればまだまだ沢山有る』。又、『その辺では、時々人骨らしき物が網に懸かる事が有り、足の骨と分かる物も有った』と言う。

嘗て、此処に合戦塚が在り、供養の板碑が上げられて居たと考えられ無いだらうか？

註、元荒川は、以前は北越谷地内を流れて居た、堤外地の地番が今も残っている。

迎 撰 院

越谷市宮本町二丁目に在る、岩付領木田村金剛院末、貞言宗、越谷山神宮寺迎撰院、寺伝に天文四年（一五三五）賢栄法印による中興開基とし、天正十九年、家康より寺領五石の朱印を受領した。

当寺は古くから越ヶ谷郷総鎮守久伊豆神社・浅間神社・愛宕等の別当である。

当寺には、越谷市指定、有形文化財、古文書が所蔵している。

「（前略）天正十九年（一五九二）九月、徳川家康寄進、寺領五石の朱

印状が交付され、以来代々の將軍代替り毎に交付を受、全十二通を所持して居る」。

武州埼玉郡四町野村 書上帳 「御朱印 高五石 迎撰院他、久伊豆神社・浅間社・神明権荷

社等除地在之」。

板 碑

迎撰院には、本堂の建て替えの際に出土した、応仁元年（一四六七）の板碑の外、文明十七年（一四八五）・永禄七年（一五六四）外が有る。又、最近墓地の改装の際に、享禄三年（一五二九）・永禄？等の板碑を所蔵して居る。

以 上

古志賀合氏館跡 史跡めぐり案内

越谷市郷土研究会

発行日 平成元年二月二十八日

越谷市弥生町 一の九

著者 山崎 善司

発行者 越谷市弥生町 一の九

山崎 善司

発行所 越谷市弥生町 一の九

山崎企画工房

TEL 6213733